

Kastanie と marronnier

—— 樹木とイメージ ——

山 根 宏

- I. 栗の木を知らなかった鷗外
- II. 日本人が見た Kastanie
- III. 栗とマロニエ
- IV. Kastanie は栗にあらず

I. 栗の木を知らなかった鷗外

日本のゲルマニストの中には森鷗外に関心をもっている人が少なくない。これは小説家としての鷗外のデビュー作がドイツを舞台にした「ドイツ三部作」であり、鷗外の西洋的教養がドイツを窓口に行っていることと関わりがあろう。ゲルマニストの末席に連なる筆者もまた鷗外好きの一人である。『舞姫』や『うたかたの記』はこれまでに何度読んだか知れない。加えて、10年前に学外研究で、鷗外の留學生活の出発点であった Leipzig に滞在してからは『独逸日記』も愛読書のリストに加わった。そしてここ数年はドイツに行く機会をつかまえては「ドイツ三部作」や『独逸日記』に登場する場所を追いかけるようなことをしている。

『独逸日記』を読むと、初期の「ドイツ三部作」だけでなく、後年のいくつかの作品においても、若き日のドイツでの体験が種となっていることがわかる。明治後期の日本で活躍することになる政治家や軍人の若き日の姿を見る面白さもある。また『独逸日記』そのものが、水を得た魚のようにドイツ人社会で潑刺としていた意気軒昂な若者が、Leipzig—Dresden—München—Berlin と住居を変え、環境が変化する中で、いつしか日本人社会の人間関係に絡めとられ、みずみずしさを失っていく様を描いた小説として読むこともできる。

このように筆者にとっては多様な観点から興味深い『独逸日記』であるが、この中に以前から気になっている記述がある。人物や作品との関連などについては詳細な注をつけている筑摩文庫版『独逸日記』でもこれについては何ら注記がない。それが取るに足らない些事であるためなのか、それとも単に気づかれていないだけなのか、いずれにせよ鷗外研究にとっては重要ではないことは確かだが、樹木好きのゲルマニストである筆者としては読み飛ばすことのできない関心事である。気になる記述とは次の一文である。

園の後に栗林あり。紅白の花を着く¹⁾。(明治18年5月18日)

問題は栗林の「栗」である。栗は日本では梅雨の頃、6月中旬から下旬にかけてクリーム色がかった白い花を咲かせるが、ドイツでは5月中旬に紅白の花をつけるというのであろうか。そうではないだろう。鷗外が見ているのは明らかにドイツの公園の立木や街路樹としてどこでも見られる Kastanie で、これは近年まで何度も繰り返されてきた「Kastanie すなわち栗」とする誤解のもっとも早い時期の一例なのである。Kastanie の花のほとんどは白であるが稀に赤い花も見られ、筆者の印象では9:1ないしは8:2といったところである。ここに言及された「栗」は誤りで、正しくは「トチ（橡、栃）」でなければならない。

『独逸日記』には「栗」がもう一度出てくる。それは『うたかたの記』の舞台となった Starnbergersee に滞在した時のことである。

「レオニ」客舎 Gasthof Leoni に投ず。湖畔の小園、栗の木蔭を成し、頗る意に適す²⁾。(明治19年9月5日)。

これも Kastanie である。Kastanie は葉が大きく繁って木蔭をつくるので、木立や街路樹として好まれている。筆者は2年前に Starnbergersee を訪れ、『独逸日記』に書かれている場所を歩いてまわったが、Gasthof Leoni のあったところは今もホテルになっていて、湖に面した庭にはやはり Kastanien が立ち並んでいた。鷗外が来たのは百年以上も昔のことであることを思えば、高さや幹の太さから察して鷗外が見た木がそのまま立っていたとは考えにくいだが、ホテルも庭も代は替っても同じ姿を続けているものと推察された。一方、日本語の「栗」に相当する木はドイツでは極めて珍しく、ごく普通に見られる木ではない。筆者がドイツで栗の木を見たのは Frankfurt から列車で1時間ほど行った Bad Homburg の城で、そこにある広大な庭園に ^{ママ}EBkastanienhain (栗林) と名付けられた一角があった。ドイツの「栗」はそれほど特別な扱いを受ける数少ない木なのである。

なお、『独逸日記』では明治19年11月18日に「夜中沢と「グリユウンワルド」客館に会す。栗を喫す。煨栗は冬盛時に之を売る。売る者は皆伊太利人なり。栗を君、Maroni, Signore の声街に満つ。」³⁾とあるが、この栗は樹木としての栗ではなく、焼いて食用にした栗なので本稿での考察の外に置く。

Kastanie (橡、栃) と栗がドイツ語以外ではどのように呼ばれているかを示したものが次の表である。

Kastanie と marronnier (山根)

日本語	学名 (分類)	ドイツ語	英語	フランス語	イタリア語
橡、枳	Aesculus (トチノキ科)	Kastanie (Rosskastanie)	horse chestnut	marronnier	ippocastano
栗	Castanea sativa (ブナ科)	Edelkastanie (Esskastanie)	chestnut	marrons	castagno

(筆者が作成)

まず目につくことは、この二つの植物が学術的には学名も分類もまったく異なっていることである。それにもかかわらずドイツ語からイタリア語まで日常的な呼び名は似通っている。面白いことにドイツ語以外は「栗」のほうが基準になっていて、その関連語として「橡」が扱われているのに対し（イタリア語の ippo は英語の horse と同じく「馬」を意味する）、ドイツ語では Kastanie が先にあって「栗」はその派生語となり、「高貴な (edel)」という形容詞や「食べる (essen)」という動詞の語幹を新たな意味を付与する接頭辞としてつけていることである。なお Kastanie の別称として Rosskastanie をあげておいたが、この Ross も「馬」を意味し、Rosskastanie は英語からの訳語と思われる。「橡」の意味では通常は Kastanie で表わされる。人間と植物の関わりと言え、食用になる「栗」が身近な存在で、それに似た「橡」が「栗」の派生語として扱われるのはごく自然なことであろう。ドイツ語のように「橡」に基準があって「栗」がその関連語というのは例外的で、このことは、ドイツ語圏にあっては「橡」がまず身近な植物として知られていたところに、それに似た実をつける「栗」が後から伝わってきた歴史をうかがわせる。

なお、Kastanie は日本の「トチ」に酷似するが、「トチ」の実を包む分厚い皮が滑らかであるのに対し、Kastanie の実の皮には棘状の突起が付いているという違いがある。また日本の「トチ」の花は白だけであるが、Kastanie には白い花の咲くものと赤い花が咲くものがある⁴⁾。このことから Kastanie は植物学的には「セイヨウトチノキ」と称されるが、日常語としては「トチ」といいだろう。また、日本の「トチ」は何度も水に晒して餅などを作るがドイツでは Kastanie を食用とすることはなく、しかし、ここでは両者の違いは無視して同等に扱うことにし、表記の上で区別する必要がある場合には Kastanie ないし marronnier の訳語としての「トチ」には「橡」を当て、日本に自生する「トチ」は「枳」と書くことにする。但し、引用文においては原文の表記のままとする。

さて学術的にははっきりと区別されている「橡・枳」と「栗」がヨーロッパ語ではなぜこのように似通った名前と呼ばれるのだろうか。以下の写真で「Kastanie (橡)・枳」と「栗」を見比べていただきたい。まずは両者がまったく似ていないことが確認できるはずである。

	Kastanie (橡)・栎	栗
葉	 <p data-bbox="299 614 724 720">日本の栎。楓のように1枚の葉に深い切れ込みがあるのではなく、5枚から7枚ほどの独立した葉が集まって1枚のように見える。Kastanie も同じである。</p>  <p data-bbox="299 1091 724 1145">赤い Kastanie の若木。赤花の木は葉がやや小ぶりで丸みを帯びている。</p>	 <p data-bbox="751 614 1177 668">葉を横から見たところ。栗の葉は長い軸の左右に交互に細長い葉がつく。</p>  <p data-bbox="751 1091 1177 1145">同じ葉を上から見たところ。左右に交互に葉がでている様子がよくわかる。</p>
花	 <p data-bbox="299 1522 724 1576">白い Kastanie。小さな花が集まって円錐形をつくる。写真の花は珍しい9月の狂い咲き。</p>	 <p data-bbox="751 1522 1177 1576">栗の花はややクリーム色を帯びた白。小さな花が集まって細長い穂ができる。</p>

Kastanie と marronnier (山根)



赤い Kastanie。手前の木の右半分にたくさんの花が見える。



地面に落ちた栗の花。栗の花は小さな花が一つずつ落ちるのではなく、穂の形のまま落ちる。

果実



Kastanie の実。はっきりと突起（棘）が見える。



栗の毬（いが）。



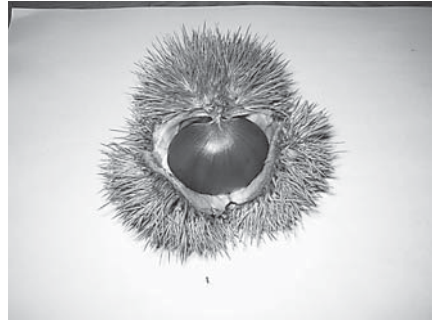
日本の栂の実。写真では実が小さくて判りにくいですが、Kastanie と違って莢に突起（棘）がない。



秋になって熟すと毬が割れて中の実が見える。



熟して今にも莢を割りそうな Kastanie の実。



熟して落ちた栗の実。



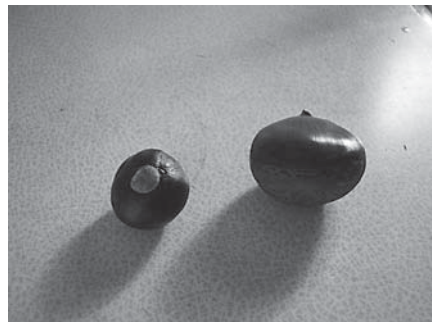
莢から取り出した Kastanie の実。ひとつの莢に1個の実しか入っていない。栗の実のように尖った天辺はない。右は実の底部を示すために並べた別の実。



右が栗の実。比較するために Kastanie の実を左に並べた。Kastanie の実は栗より色が濃いものが多いが、よく見るとマーブル模様の不規則な縞模様を確認できる。



日本の枳の実と莢。莢に突起（棘）がないことがよくわかる。



Kastanie (左) と栗の底部を比べたもの。

(写真はすべて筆者が撮影)

葉や花がまったく異なっている橡と栗が、ヨーロッパ語では相互の関連語で呼ばれるようになった原因はひとえに実の形にある。熟して莢から出た Kastanie の実は色といい光沢といい栗

の実によく似ているので、栗の実を見なれた人間が、秋になって路上のあちらこちらに落ちている Kastanie の実を栗の仲間とんでも不思議ではない。もちろんそれぞれの実を並べてよく見るとその違いは明瞭であるが、橡の実が他のどんな実よりも栗に似ていることは否定できない。

しかし実の外見の類似性はともかく、上に述べてきたように Kastanie と栗とではこれほど明瞭な違いがある以上、双方の木を知っていれば両者を混同することはありえない。にもかかわらず、ドイツで Kastanie を見ているはずの鷗外がそれを栗と信じて疑わなかったのはなぜか。答えは明らかであろう。鷗外は栗の木を知らなかったのである。筆者は田舎育ちで幼いころから身近に栗の木を見てきたので、このことに気づいたときは驚いたが、考えてみれば、十歳の時に津和野から上京し、そのまま東京に育った鷗外は栗の木に接する機会を持たなかったとしても不思議ではない。栗の実も知らなかったとは考えられないが、栗がどんな木であるのかを鷗外は知らなかったのである。むろん、橡も知らなかったことは言うまでもない。

では鷗外の頭の中で「Kastanie すなわち 栗」がどのようにして定着したのだろうか。論理的には次の二通りの可能性が考えられる。いずれの場合も栗がどんな木でどのような花を咲かせるかは知らないことが前提となる。

その一：Kastanie をドイツで初めて見た時、Kastanie という名前もその日本語名も知らなかったが、実を見てそれを自分が知っている「栗の実」の一種と判断した。後にその木がドイツでは Kastanie と呼ばれていることを知り、「栗すなわち Kastanie」が頭の中で定着した。春に Kastanie が白や赤の花を咲かせているのを見、「園の後に栗林あり。紅白の花を着く」と書いた。

その二：ドイツ語を習得する過程で「栗」を意味する Kastanie という語彙を覚えたが、それがどんな木であるかは知らなかった。ドイツで Kastanie を実際に見ることによって、Kastanie すなわち「栗」が「紅白の花を着」けることを知った。

このうち第一のケースは現実的には考えにくい。なぜなら鷗外がドイツに着いたのは10月17日(明治17年)で、この時期には Kastanie は実はもう落ちてしまっていたと考えられるからである。通常、9月には実はあらかた落ちてしまう。10月ともなれば葉も散ってしまっている公算が大である。したがって、秋と冬に裸木の Kastanie だけを見ていた鷗外が翌年の春に「園の後に栗林あり。紅白の花を着く」と書くことは不可能であったと言わざるをえない。では残る可能性は第二のケースであるが、その場合は Kastanie も「栗の木」もその実物を知らないまま、辞書を頼りに「Kastanie すなわち栗」と覚えたということになり、別の見方をすれば辞書が誤って教えたことになる。こんなことがありうるのだろうか。鷗外がドイツ語を学ぶ際に使った辞書が確認できないので決定的なことは言えないが、実は、後述するように Kastanie を栗と思っていたのは鷗外だけではなかったのである⁵⁾。

Ⅱ. 日本人が見た Kastanie

ここで少し時間を遡って、鷗外より前の日本人が Kastanie を日本語でどう呼んだのかを調べてみることにする。鷗外の 11 年ほど前の明治 6 年 5 月 4 日に Frankfurt の街並みを見た岩倉使節団の久米邦武は次のように書く。

此園ノ前ヲ過ル広街ニハ、中央ニ鉄軌ヲシキ、街車ヲ往来セシムルコト、米利堅ノ各都府ノ如シ、両側ニハ「ホースチェストナツト」樹ヲ植ユ、此樹ハ欧羅巴ニテ劇賞スル樹ニテ、其葉ハ槲ニ似テ、薄ク色翠ナリ、六七葉ツ、一叢シテ展ヒ、花ヲ其間ニ開ク、花ハ細ニシテ観ルニ足ラス、只枝ヲ開キ梢ヲ繁クシ、清蔭ヲナサシメ、其下ニ往来スレハ、嵐翠冷冶、人ニ清浄ノ気分ヲ与フ、冬季ニ至レハ、葉ヲ落シ、温日ヲ漏ス、是其賞ナリ⁶⁾。(下線は引用者。以下同様)

これが『米欧回覧実記』（以下、『実記』と略す）に出てくる Kastanie である。ここからわかることは、久米はイギリスおよびロシアについて述べたところで「栗」の木に言及している⁷⁾ので栗の木は知っており、それと Kastanie とは異なることを承知している、しかし、Kastanie に対応する日本語の樹木名が分からないため英語の horse chestnut で間に合わせた、ということである。多分、Kastanie というドイツ語名も知らないまま英語の horse chestnut で覚えたのだろう。考えてみれば日本では山野に自生する枹は多くの人間にとっては栗よりさらに縁遠い木であっただろう。そう考えれば久米がその名を知らなかったのも不思議ではない。『実記』ではあと 2ヶ所において Kastanie への言及がなされているが、いずれの場合も Kastanie は「ホースチェストナツト」で代用している⁸⁾。

ここにドイツの Kastanie を日本人がどう呼んでいたかを調べるのに便利な本がある。世界紀行文学全集というシリーズの一冊で第七巻がドイツにあてられている。文学者を中心に全部で 43 人の文章を収めている。多くは比較的短期の滞在者で、見るもの、聞くものが新鮮でそれを言葉で表現しようとしている貴重な資料である。鷗外の『独逸日記』を筆頭に年代順に並べられているので、明治 17 年から昭和 13 年までのドイツ社会の移り変わりをうかがう上でも興味深い編集である。それらの文章の中に Kastanie を指していると考えられる言葉を拾ってみる。最初に紹介するのは中村吉蔵という劇作家が夏の Berlin 郊外を逍遥した模様を描いたものである。

乾燥し切った砂地の何処迄も拡がって行く上を、ひょろ長く瘦せた松の林や、リンデン、榧、栗、榆、白樺などの雑木林が断続した曠野の中に、伯林二百万の市民を胎んだ大都市は、白い壁の胸と赤い屋根の頭とを高く日光に晒して、黒い煤煙の呼吸をしている⁹⁾、

この著者は野鴨、^{ヴィルトエント グルネワルトゼー}緑林湖などと日本語に対応するドイツ語をルビで示しているところからドイツ語には慣れ親しんでいると思われる。それだけに引用文中の「栗」にルビを振ってくれていれば、と惜しまれるのであるが、この雑木林に見られるこの「栗」はやはり Kastanie を指していると考えて差し支えないであろう。これが書かれたのは明治 41、42 年で、鷗外の『独逸日記』の二十数年後のことである。栗の木を知らないまま「Kastanie すなわち栗」と覚えた学習者は鷗外だけではなかったのである。この中村吉蔵の場合は「栗」が Kastanie を指している可能性は 100 パーセントとは言い切れない¹⁰⁾ が、次のようにはっきりと証拠を示してくれている文もある。

^{リンデン}菩提樹、^{カスタニエ}栗樹、^{ウルメ アイヒエ}榆、^{カスタニエン}榲桲と伯林の街路樹の数は多い。(中略) あの対岸に生繁る栗樹が枝も撓わに白い花で飾られるとき、吾々は市中に居ても「奇しく美しき五月」と歌った詩人の心を解する事が出来る¹¹⁾。

著者である成瀬無極は京都帝国大学教授を務めた著名なドイツ文学者である。中村と同様に成瀬も文中の言葉に対応するドイツ語をルビで示していることは上の引用に見られる通りであるが、この人の文には珍しい特徴があって「其間に李、木蓮、桃、木瓜の類が咲き乱れ、数多い広場にはの空から降り滾れたように黄紫の葶や^{ブラッツ}継母草や^{シュテイフミュッタアヒエン}忘れな草などが匂うのである」のように同じ植物でもドイツ語のルビのついているものとついでないものがあるところから、ルビのついている言葉はその知識の背後にドイツ語が控えている様子がかうかがえる。ドイツ語を通じて獲得した語彙と言ってもいいのではないだろう。だとすると成瀬にとって「栗樹」は Kastanie を日本語に訳した言葉であって、子どもの頃からなじんでいた木ではないことになる。この文が書かれたのは大正 11 年で、鷗外の『独逸日記』から数えて 40 年近くも経っている。「Kastanie すなわち栗」の呪縛がいかに強力であったかがよくわかる¹²⁾。いや、むしろ成瀬のようなドイツ文学者たちが「Kastanie すなわち栗」を強固なものにしていったというべきであろう。ちなみにこの成瀬という文学者は正直な人で引用した文の別のところでは次のように書いている。

いつしかあの「フリーダ」の花が咲き始めた。実はこの花と「ホルンダ」の花との区別が曖昧で「^{じわとこ}接骨木」と漠然訳していたが来てみると二つの花は全然別のものであることを知った。俗に両者を混同して用いる事もあるようだが正しくない。「フリーダ」は「ライラック」である¹³⁾。

このエピソードは、日本にいて辞書を手掛かりに外国語を学ぶ時に陥る避けがたい困難と陥りやすい過ちを如実に物語っている。もし成瀬がドイツ語に触れる前から「栗の木」を知っていれば、ドイツで Kastanie を見た時にそれが橡であると分かったかどうかは別にして、少なくとも「Kastanie すなわち栗」が誤りであることに気づいたはずである。

Ⅲ. 栗とマロニエ

Kastanie を一義的に「栗」とする独和辞典の記述は昭和に入っても変わらずに残っている。実例を見ていただきたい。

Kastanie [ka'sta:-
ni:ə] *f*, -*n* (ラ. *castanea*, 希. *kastania*, 栗の林に
囲まれた Kastana [黒海沿岸の都市名] より出づ)
栗(の實又は木); *unechte* (od. *wilde*) ~, 橡(の)
實又は木); *die* ~ *n für j-n aus dem Feuer holen*,
ありがたがられぬのに誰のために危険を冒す.
Kastanien-baum *m* 栗の樹; *wilder*, 橡の木.

独和言林 (白水社、昭和 11 年)

昭和 11 年に刊行された『独和言林』で Kastanie が「栗」と説明され、*unecht* (「真正でない」)とか *wild* (「野生の」) といった形容詞を冠した Kastanie が「橡」とされているということは、『独和言林』より以前の独和辞典でも Kastanie が「栗」と解されていたことを物語る。なぜなら、辞書の編纂にあたっては先行する辞書を参照するはずであり、そこで見つかった誤りを正すのが新たな辞書の重要な役割の一つであるからである。先行の辞書では正しかったものが後発の辞書で誤ったものに改められるなどという事態は考えられない。おそらくは最初につくられた独和辞典から『独和言林』まで、語義の記述や用例に変化はあっても Kastanie には一貫して「栗」が充てられていたものと思われる。

辞書がこのようであれば、それに依拠した翻訳がどうなるかは明白である。日本で翻訳されたドイツの文学作品の中で Kastanie を「栗」と訳している例は枚挙に遑がないが、ここではゲーテの『若きウェルテルの悩み』の一部を紹介しよう。どちらも日本のドイツ文学界を代表する人たちの手になるだけに、影響するところが極めて大きいと言わねばならない。

アルベルトは夕食後すぐロッセと庭へくると約束したので、僕は大きな栗の木立の下の高臺に出て、沈んで行く太陽を眺めてゐた。このやさしい谷間も、ゆるやかな河の流れも、これが見納めだ¹⁴⁾。

アルベルトは、夕食がすんだらすぐにロッセと一緒に庭園にいる、と約束した。私はテラスの上の高い栗の木の下にたたずんで、落日を見送った。これを見るのも今日かぎりと思ふままに、ゆるやかな川の彼方のやさしい谷の上に、太陽は沈んでいった¹⁵⁾。

二つの翻訳の文体は大きく異なっているが Kastanie だけはかたくななまでに「栗」が守られ

ている。両者はたまたま同じ昭和 26 年に刊行されているが、この時点で 20 人を超えるゲルマニストたちによって『若きウエルテルの悩み』の翻訳が公にされている。その間、さまざまな翻訳の上での工夫はなされたであろうがそれにもかかわらず「Kastanie すなわち栗」は守られてきたのであろう。そして後述するように、この事態はかなり最近まで大きく変わってはいなかったのである。ちなみに、ここに紹介した 2 種類の『ウエルテル』の翻訳は版を重ね、初版から 60 年を経た現在も「栗の木」のままで店頭に並んでいる。

このように独和辞典と翻訳の世界では昭和に入っても Kastanie は依然として「栗」に止まっているが、自分の眼で Kastanie を見た日本人の中には、既に大正時代に Kastanie が「栗」ではないことに気づいた人もいた。初めの二つは大正 12 年に、最後の茅野の文章は大正 14 年に書かれたものである。

リュッツォ橋の方を見ると、掘割がぐいと右の方にうねっているので、吊橋が半分しか見えない。半分は、河岸の並樹の、カスターニエンの青葉の蔭に隠れている。(小宮豊隆『ベルリンの一日』¹⁶⁾ 一大正 12 年)。

又あのカスターニエンの美しいレオポルド街の並木道を、木かげに迸る噴水や、ブンゼンやナドラーの像に目をとめながら歩いたこともある。(林久男『南独の自然と文化』¹⁷⁾ 一大正 12 年)。

十一月下旬のある日曜、カスターニエンも菩提樹も、街路樹は悉く葉を振り落とされて丸裸で寒い風にふるえている街路の上に」(茅野蕭々『伯林の冬』¹⁸⁾ 一大正 14 年)。

彼らもドイツ語を学び始めた時には「Kastanie すなわち栗」と覚えたに違いない。だがドイツに来て Kastanie が日本で見なれた栗ではないことに気づいたものの、この木を表す日本語がわからなかったために原音を片仮名で表記するという方法を選んだと推測される。ただ残念なことに日本語の文章に片仮名でカスターニエ (カスターニエン) と書くと落ち着きが悪く、無理をしている感じが拭えない。

しかし同じ木のフランス語名 (marronnier) を原音で表記した「マロニエ」はかなり自然に見えるように見える。用いられたのが早い¹⁹⁾、それとも音の柔らかさが好まれたのか、すっかり日本語として定着しており、国語辞典の見出し語にもなっている。むろん、日本人の誰もがマロニエの木や花を知っているわけではない。むしろ実際の姿は知らない人の方が多いかも知れない。しかしここで重要なことはマロニエと聞いて花や実を思い浮かべるかどうかでは必ずしもない。むろん、実物を知っていればその姿形を思い浮かべることができるが、ここでの問題は少なくとも言葉として違和感があるかないかである。マロニエと言えば何となくパリの花と連想されればそれで十分なのである。頭はそれで納得し、石でも呑み込んだような異物感を感じないで済む。そこがカスターニエと違うところである。このカスターニエという言葉は

ほとんどの日本人には縁がなく、何一つ想起させるものがない。想起させるものがないということは頭の中に納まるべき場所をもたないことを意味し、あくまでも異物に留まるのは避けられない。

おもしろいことに「カスターニエン」と「マロニエ」を使い分けて用いたゲルマニストもいる。アララギ派のすぐれた歌人であると同時にリルケ研究者としても名高い高安国世である。高安はリルケの『新詩集』中のある作品を「カスターニエン並木の出逢い」と訳す²⁰⁾一方で、パリで目にした marronnier は「マロニエ」と書き表している。

モンマルトル墓地の傍らを通り、マドレーヌ寺院からコンコルドの広場を抜け、ブローニュの森に入った。街のまんなかにもこのように広い森があるのは驚くべきことだが、行けども行けども森があり、池があり、公園というより自然の林であった。木々は芽吹き、マロニエは咲いていた²¹⁾。

高安が「Kastanie すなわち栗」を脱却しているのは好ましいが、ドイツで Kastanie を見、パリでマロニエを見ているのであれば両者が同じ木であることは承知しているはずである。それにもかかわらずそれぞれ異なった名前をあてているのは、単に日本語名の「橡・栎」に思い当たらなかっただけなのか、あるいは原語の音を大切にしたいからなのか、そこのところは不明であるが、見方を変えればこれは日本におけるヨーロッパ受容の偏ったありかたの反映と取れなくもない。つまり日本でなされてきたのはヨーロッパ受容（そもそもトータルなヨーロッパという概念そのものがその存在を問われなければならないのであるが）ではなく、個別のドイツ受容でありフランス受容であったということである。ドイツ経由なら「栗」、フランスから伝われば「マロニエ」というわけである。

しかし同じくゲルマニストであっても、1913年（大正2年）生まれの高安より10歳ほど年長の大山定一²²⁾はドイツで Kastanie を見て躊躇なく「マロニエ」と書いている。

デュッセルドルフは思ったよりも美しい市だった。わずか二日しか滞在しなかったが、ケーニヒスアレーという中心街は中央にちいさな運河があって、その両側が大きなマロニエの並木になっていた²³⁾。

これは大山が1959年（昭和34年）に初めてドイツ（当時は西ドイツ）を訪れた時の記録である。大山が最初にドイツの地を踏んだのがデュッセルドルフであったと書かれているから、ドイツに入ってからすぐにマロニエの並木を見たことになる。このことから、大山は日本にいるときから Kastanie をマロニエと認識していたことがわかる。同じドイツ文学者であっても東大出身の竹山と高橋が『ウエルテル』で「栗」を使い、京大出身の大山と高安がエッセイで「マロニエ」と書いているのは偶然かも知れないが、対立しあっているようにも見えて面白い。

上に引いた高安と大山の文章はいずれも戦後になってからのものであるが、時間を大正に戻

すと、「マロニエ」を介してようやく Kastanie が「橡」と結びついたのが次の文である。茅野の文章が書かれたのと同じく大正 14 年であった。

部屋に荷物を置いた後、テラスで茶を飲み、それから広い斜面になった庭の中を案内してもらおう。ドイツ語でフリーダというリラの花、カスターニエンというマロニエ(橡)は、フランス以来の馴染である²⁴⁾(安倍能成『新緑のハイデルベルヒ』)。

この文章から、安倍はドイツに来る前にフランスに入った、そこで marronnier を知り、それが日本語では「橡」に当たると知ったことがわかる。このことは、フランス語の世界は「Kastanie すなわち栗」のような誤った呪縛から自由であったことを物語る。つまり早くから「marronnier すなわち橡」が定着していたのである。徳富蘆花・愛子の共同執筆になる『伯林日記』(大正 8 年)には次のような文章が見える。マロニエとさえ呼んでいない。目に入った marronnier がそのまま「橡」と認識されているのである。

何と云う静けさ！伯林に居ながらちっとも伯林の心地はせぬ。それは巴里の Hotel に居ながら窓から橡の木を覗く私共の室が少しも巴里の真中に居る心地を与えなかったのと同様だ²⁵⁾。

『世界紀行文学全集 7 ドイツ』で探した限りでは、ドイツ語圏で「マロニエ」を介することなく Kastanie を「トチ」としている例はようやく昭和に入ってからでそれも 1 例しかない。書いたのは日本画家の東山魁夷である。ゲルマニストが文字と言葉に寄りかかる習癖から「Kastanie すなわち栗」の呪縛を解くことができなかったのに対し、眼の人である東山は苦も無く Kastanie を「栃」と同定しえたということであろうか。

楓や栃、菩提樹等の街路樹も色づきました。霧が深い日も時々あります。伯林はオペラの季節になりました。(中略)春が来たと思ったら、伯林の森は急に若葉で賑やかになり、桜もリラもカスターニエンの花も一時に咲き出しました。陰気な長い冬を家の中に閉じ込められていた人々は、待ちかねたように郊外に出歩きます²⁶⁾。

高安の文にも見られるように、marronnier は「橡」で置き換えずに「マロニエ」と原音表記することが半ば習慣化しているようであるが、上の安倍能成や徳富蘆花の文章から、日本のロマニストの世界ではドイツ語と違って「marronnier すなわち橡」が早くから知られていたと推測される。これがどの時代まで遡ることができるのかは分からないが、遅くとも明治の終わりには知られていたことを永井荷風の文章が明らかにしてくれている。

頭の上で鳩が二三羽太い鳴聲と共に古びたメデシの噴井ふんせいの方に飛立つとびた。その羽音と共に

マロニエー
 橡樹の白い花が、散り落ちた上に、またはらはらと散りかかる²⁷⁾。

これは明治 42 年に刊行される予定であった荷風の『ふらんす物語』に収められた作品の一節である。荷風は作品の中によく植物をとりいれているが、その中でも特に橡が気に入ったらしく、ある作品集のタイトルを『橡の落葉』とし、その序文にマロニエ賛歌ともいべき美しい文章を寄せている。少し長くなるが紹介しておきたい。

バリー
 巴里の市街には繁華の大通り、静なる寺院のほとり、公園、四辻、河岸、到る處にマロニエーと呼びて、わが國の橡に類したる樹木を植ゑたり。四月の初め芽をふきて、忽ち一ツの莖より五ツに分かれたる幅廣き若葉となる。その緑はわが國の植物には見るべくもあらぬ浅く軟き色なれば、明き春の青空の光はこれを射透して、色付ける幽邃の微光に深き木蔭を夢の世の如くならしむ。五月に至りて蒼白き花を著く。其の形は大なる總の如く、かの國の人は、譬ふるに、宮殿の天井より釣下げたる白銀の燭臺を以てしたり。風なき夏の午過ぎに、紛々として雪をなす。秋來れば、物の衰れを感ずる事、他の草木にまさりて早く、朝夕の冷き霧、街の敷石を潤すに先立ちて、一夜に盡く搖落せり。されば、市街を飾るべき並木の植物としては、これに優りたるもの無しとせらる。ああ、われは如何に此のマロニエーを愛せしか²⁸⁾。

これはあくまでの個人的な印象に基づく推論でしかないが、フランスあるいはフランス文学において marronnier は樹木の中では絶対的な地位を占めているのではなかろうか。かたやドイツ文学の世界では、marronnier を愛する荷風ほどではないにせよ Kastanie を最も好む筆者にとっては残念なことに、この樹木の地位はそれほど高くないように思われる。ドイツ文学では何と言っても菩提樹 (Linde) である。忠誠の象徴である榎・榦 (Eiche) がこれに続き、Kastanie は林檎 (Apfel)・樺 (山毛櫸) (Buche)・白樺 (Birke)・楓 (Ahorn) などと並んで第 3 グループを形成していると言えるだろう。もし菩提樹の地位にあれば Kastanie の誤解ももっと早く解けていたのではないだろうか。

IV. Kastanie は栗にあらず

これまで見てきたように、現地で Kastanie を見てそれを「栗」で置き換える傾向は時代が下るにつれて少しずつつまってきた。ではドイツ語学習の入口である独和辞書の世界はその変化を反映させていたかというところはなっていない。例えば筆者がドイツ語を学んだ昭和 40 年代の独和辞典といえまです「木村・相良独和辞典」であった。同級生のほとんどがこれを使っていたように記憶する。この辞書の Kastanie の項目は次のようになっている。

Kastānie [kastá:niə] [gr. - lat.] *f.* -n, ①
 〔植〕(Edel-)くり(栗)の木及び実; 〔比〕die
 ~n für jn. aus dem Feuer holen, 火中
 の栗を拾う。② 〔植〕とち(橡)の類; *unechte*
 (od. wilde) ~, 同上。③ 〔動〕(馬の足の内
 側にある)角質のたこ。

木村・相良独和辞典[新訂版] (博友社、昭和 38 年)

昭和 11 年の『独和言林』が語義として「栗」しか挙げず、*unecht* とか *wild* といった形容詞をかぶせることで「橡」を挙げていたのと比べると、木村・相良独和辞典では「橡」が「栗」とは独立した語義として挙げられていることが新しい。しかし初学者はとかく最初に挙げられた語義がもっとも重要であると思いきがちである。その上、ここでも *unechte* (od. wilde) ~ を用例として挙げているので、『独和言林』と同じく、「栗」が基本の意味で「橡」はその特殊な用法であるかのように読まれてしまう危険性がある。これでは「Kastanie すなわち栗」を強めこそすれ、見直させることにはならない。昭和 40 年代になってもまだ過去の誤りが完全に払拭されていないのである。

筆者がドイツ文学の勉強を始めて間もない時期に、同じ大学の先輩たちがその昔、若きドイツ文学研究者であった頃に『カスタニエン』という同人誌を刊行して互いに研鑽に励んでおられたということを知った。この同人誌については中心メンバーであった大山定一の没後に刊行された追悼文集に、編集委員の一人、和田洋一が一文を寄せている。それによると「カスタニエン」という雑誌の名前を提案したのは大山であったという²⁹⁾。だとすればメンバーにはそれが「栗」ではなく「マロニエ」ないし「橡」を意味することは知られていたものと思われる。しかしまだ辞書を片手にたどたどしくドイツ語を読むだけの筆者はそんなことを知る由もない。当然のことながら、初学者であった筆者も「Kastanie すなわち栗」で育った一人であった。だから、同人誌の『カスタニエン』という名前も日本の野山に立っている栗の木を想起させるだけで、カスタニエンという異国の響きと喚起するイメージとが私の頭の中で不協和音を奏でていた。

この違和感が消えるには、筆者がドイツで本当の *Kastanie* を識ることによって「Kastanie すなわち栗」の呪縛から解放されることが必要であった。1982 (昭和 57) 年から 83 (昭和 58) 年にかけて住んだのは当時の東ベルリンだったが、この滞在中に *Kastanie* の葉と花と実を見て、それが子どものころから慣れ親しんだ栗ではないことを知ったのである。最初に気がついたのは知人のアパートを訪ねたおりに中庭に立っている *Kastanie* を見た時だった。その後、花が咲き、実をつけるのを見て *Kastanie* への愛着が高じ、帰国に際して秋には実を送ってくれるよう知人に依頼するほどになった。それだけに帰国後に読んだドイツの小説の翻訳で、よりによってベルリンの街を描いた場面で「栗」が出てきたときには、知人のアパートの窓から見た光景に子どもの頃に見た日本の田舎の風景が重なったような混乱を覚えた。筆者の「Kastanie すなわち栗」に対する強い拒否反応はこの時から始まったと述べている。

まず目につくのは、この街が四角形を基にして直線的に配列され、曲がったものはまったくなく、都心では賃貸アパートが城塞でんと建ち並んでいるのが目立つ。たいてい中庭を囲んだ四角形をしており、中庭には一本の栗の木が立っている。その栗の木の梢がかすかに揺れはじめると、住人は外の通りでは風力六ないし八の疾風が吹き荒れていると悟るわけだ³⁰⁾。

以前から「マロニエ」という言葉は知っていたが、東ベルリンに滞在していた時点で Kastanie がフランスの marronnier と同じであることに気づいていたかどうかは記憶が定かではない。日本の栲によく似ていて、植物学的にはセイヨウトチノキと呼ばれていることを知ったのは間違いなくもっと先のことである。それを教えてくれたのは昭和 60 年に刊行された『小学館 大独和辞典』であった³¹⁾。

Ka.sta.nie [kastá:niə] ㊦ ~/-n **1 a** (Edelkastanie) 〔植〕クリ(栗)属、**b** (Eßkastanie) クリの実: für *jn.* die ~n aus dem Feuer holen 〔比〕…のために火中の栗を拾う、**2 a** (Roßkastanie) マロニエ、セイヨウトチノキ、**b** マロニエ(セイヨウトチノキ)の実、**3** 〔動〕(馬の足の内側の)角質のたこ(→㊦ Pferd A), [gr.-lar. castanea; ◇ engl. chestnut]
Ka.sta.ni.en.al.lee ㊦ クリ(マロニエ)の並木道、
baum ㊦ クリ(マロニエ)の木、

小学館 独和大辞典(小学館、昭和 60 年)

Kastanie の訳語として「マロニエ、セイヨウトチノキ」を知ることができたのはありがたかったが、依然として「栗、クリ」が主で「マロニエ」が従という構図は変わっていないことが不満として残った。これは主従を逆にしなければならない、というのが筆者の強い思いであった。例えばドイツで Kastanienallee といえばマロニエの並木道でしかなく栗の並木道などまず考えられない。もちろん、ドイツ中を隈なく探せばどこかに一本ぐらいいは見つかるかもしれない。しかし、だからといって「栗の並木道」を第一義とする理由にはならない。辞書の任務はまず、ごく一般的にはどんな意味で使われるを示すことで、それなら Kastanie の語義としてはマロニエを先に出すべきである、というのが筆者の考えであった。

そんなおりに同僚が、新しい辞書を作るから手伝わないか、と誘ってくれたので、辞書の仕事も勉強になるだろうと思って引き受けることにした。重要な基本語は編集委員に名を連ねている人たちが執筆し、筆者のように後から協力に加わったメンバーには第二ランクの単語が割り当てられた。たまたま筆者に振られた単語の中に Kasnatie が含まれていた。これぞ千載一遇のチャンスと持論を実践したのが次の記述である。

Kas'ta-nie [kas'ta:niə] ㊦ -/-n (*gr.*) **1** (Rosskastanie) マロニエ, 西洋橡(橡)の木; マロニエの実。 **2** (Edelkastanie) 栗; (Esskastanie) 栗の実. die ~n aus dem Feuer holen 火中の栗を拾う (für j⁺ 人⁺のため). **3** 馬の足の(内側の)たこ, 夜目(夜目). **4** (獵師) (鹿などの)後ろ足の捲き毛.

フロイデ独和辞典 (白水社、平成 15 年)

「マロニエ」を先頭に持ってくることに迷いはなかったが、「栗」を残すかどうかについては頭を痛めた。Kastanie だけで「栗」を意味することはほとんどなくても、Edelkastanie や Esskastanie という造語の形になると「栗」を意味する。しかしこの二つがそれぞれ独立した見出し語として扱われるとは考えられないとなると、それらを残す方がいいと最終的に判断した。結果的には『小学館 大独和辞典』の 1 と 2 を入れ替えただけのようになってしまったが、マロニエを先に出したことの意味は決して小さくないと自負している。ただ、独和辞典などに当たった結果であるとはいえ Edelkastanie を「樹木としての栗」とし、Esskastanie を「栗の実」としたのは、上に紹介した Homburg の城の栗林を ^マEsskastaniehain と書いている例などを考えると、樹木と実を厳密に区別しないで「Edelkastanie, Esskastanie; 栗、栗の実」と記載したほうがよかったかも知れない。今後、改訂の機会に恵まれるかどうかかわからないが、筆者にとってはこれをもって 40 年にわたる「Kastanie すなわち栗」との葛藤は終わった。いつかドイツ文学の翻訳では Kastanie の訳語として「マロニエ」あるいは「橡」が定着する日の来ることを願ってやまない。

注

- 1) 森鷗外全集 13 「独逸日記 小倉日記」(筑摩書房、1996 年) 26 ページ。
- 2) 同上、132 ページ。
- 3) 同上 143 ページ。ちなみにこの個所の叙述は『うたかたの記』で主人公の巨勢とマリイの出会いの場面で次のように使われている。「われも片隅なる一榻に腰かけて、にぎわしきさまうち見るほどに、門の戸あけて入りしは、きたなげなる十五ばかりのイタリア栗^{くわ}うりにて、焼き栗盛りたる紙筒を、うずたかく積みし箱かいこみ、『マロオニイ、セニヨレ』(栗めせ、君)と呼ぶ声も勇ましき、後ろにつきて入りしは、十二、三と見ゆる女^{おんな}の子なりき。」
- 4) 赤い Kastanie は 18 世紀後半に北アメリカからヨーロッパに伝えられた。(A・M・コーツ『花の西洋史—花木篇』白幡洋三郎・白幡節子訳、八坂書房、1991 年)。
- 5) 現在もっとも標準的に使われていると思われる『現代和独辞典』(三修社、1980 年)では「栗: Kastanie」、「柝(橡): Rosskastanie」となっている。
- 6) 岩波文庫『米欧回覧実記』第 4 巻、229 ページ。
- 7) 「西洋ノ民ハ、道路ヲ脩ムルコトノ生理ニ緊要ナルヲシル、山僻ト雖トモ、亦善ク修繕スル此ノ如シ、路ヲ挟ミ樹ヲウエ、其樹ハ樺栗^{くぬぎ} 槲^{かえで} 榦^れノ類ナリ」(岩波文庫版、第 2 巻、229)。
「其他凋落ノ樹ハ蓋シ^{しょうらく} 槲^{はんのき} 榦^{にれかえで}ノ属ナルヘシ」(第 4 巻、44) ロシアについて。3 月 30 日

- 8) あとの2ヶ所は次の通りである。「両側ニ「ホース Chestnut」^{ママ} < 榎ニ似テ緑陰愛スヘキ樹ナリ> 樹ヲウエ、毎条坦平、遠キニ連リ髪ノ如シ (下線は引用者、以下同様) (第5巻、26)。
「又庭園街路ニ行樹ヲウエテ、其清陰ヲ養ヒ、大気ヲ清クス、此用ニ供スル広葉樹ハ、其枝葉美シテ、繁茂シ易キ、夏木ヲ適用トス、白楊、榎、槭、^{にれ かえで}「ホプラ」、ホース Chestnut」^{ママ} < 榎ニ似タル樹ナリ> ヲ主用ス、日本ノ樹木ニ此用ニ合スル良木多シ、銀杏最モ賞美セラル」(第5巻、190)。
- 9) 中村吉蔵『伯林雑記』(『世界紀行文学全集 7 ドイツ』所収、124ページ)。ほるぷ出版、昭和54年。
- 10) 決定的な証拠があるわけではないので100パーセント確実であるとは断定しないでおくが、だからといってここで言及された樹木がもしかすると本当に栗だったかも知れない、と考えているわけではない。次の寺田寅彦のように同一テキストで「栗」と「榎」とを使い分けているのでない限り、ごく普通のドイツの風景の中に描かれた「栗」は出会う可能性からみてKastanieと考える方が妥当である。寺田寅彦はスイスで見た風景を次のように書く。「二百年も経った柏の樹や、百年余りの栗の木がぼつぼつ並んで其間をうねった径が通って居ます。(中略)邸の入口から玄関までは榎の並木がつづいて居ます。」(寺田寅彦『伯林から』、上掲書、136ページ)。
- 11) 成瀬無極『ライラックの花咲く頃』(上掲書、213ページ)。
- 12) 同じく大正11年には阿部次郎が『山腹の家』と題する文で次のように書いている。「吾々は徒歩で山を下った。栗、山毛榎、榎などの間に(中略)その一番高い隅にある栗の大木の下蔭に立つと、夜はマンハイムの灯が見えるまでにライン平野の望遠を享受することが出来るのである。」上掲書、248ページ、250ページ。
- 13) 上掲書、213ページ、215ページ。
- 14) ゲーテ『若きウェルテルの悩み』(高橋義孝・訳、新潮文庫76ページ、昭和26年)。
- 15) ゲーテ『若きウェルテルの悩み』(竹山道雄・訳、岩波文庫88ページ、昭和26年)。
- 16) 『世界紀行文学全集 7 ドイツ』269ページ。
- 17) 上掲書、277ページ。
- 18) 上掲書、319ページ。
- 19) 昭和12年に松島詩子が「マロニエの木蔭」(作詞・坂口淳)を歌ってヒットさせている。「マロニエ」というエキゾチックな名称は昭和30年にエト邦枝が歌った「カスバの女」(作詞・大高ひさを)の歌詞の一節「花はマロニエ シャンゼリゼ」でさらにポピュラーになったと思われる。
- 20) リルケ全集 第3巻、233ページ(彌生書房、昭和35年)。詩の原題は „Begegnung in der Kastanienallee“。
- 21) 高安国世『ヨーロッパの旅から』(『わがリルケ』所収、253ページ)、新潮社、昭和52年。
- 22) ここで4人のゲルマニストの年代を記しておく、大山は1904年(明治37年)生まれで竹山道雄の1歳下、高安と高橋義孝は共に1913年(大正2年)生まれである。
- 23) 大山定一『ドイツをあるく』(知道出版、2004年、12ページ)。
- 24) 安倍能成『新緑のハイデルベルヒ』(『世界紀行文学全集 7 ドイツ』所収、307ページ)。
- 25) 徳富蘆花『伯林日記』(上掲書163ページ)。
- 26) 東山魁夷『ドイツ』(上掲書407ページ、409ページ)。引用した文章が書かれたのは昭和8-9年である。
- 27) 荷風全集 第3巻、547ページ。(岩波書店、昭和38年)。
- 28) 同上、596ページ。
- 29) 和田洋一『「かすたにえん」の頃』(吉川幸次郎・富士正晴編『大山定一』所収、92ページ、創樹社、昭和52年)。
- 30) ベーター・シュナイダー『壁を跳ぶ男』越智和弘・藤代幸一訳、2ページ(白水社、昭和59年)。

Kastanie と marronnier (山根)

31) 後に、『小学館 大独和辞典』より前に『コンサイス独和辞典 [第5版] (三省堂、昭和53年)』で「クリ [の木・実]、マロニエ (西洋トチノキ)」と記述されていることを知った。

参考文献

森鷗外全集 13「独逸日記 小倉日記」筑摩書房、平成8年
荷風全集 第3巻、岩波書店、昭和38年
リルケ全集 第3巻、彌生書房、昭和35年
久米邦武編『米欧回覧実記』(全5巻)岩波書店、昭和55年
志賀直哉他監修『世界紀行文学全集 7 ドイツ』ほるぷ出版、昭和54年
A・M・コーツ『花の西洋史—花木篇』(白幡洋三郎・白幡節子訳)八坂書房、平成3年
J・W・v・ゲーテ『若きウエルテルの悩み』(高橋義孝・訳)新潮社、昭和26年
J・W・v・ゲーテ『若きウエルテルの悩み』(竹山道雄・訳)岩波書店、昭和26年
ベーター・シュナイダー『壁を跳ぶ男』(越智和弘・藤代幸一訳)白水社、昭和59年
高安国世『わがリルケ』新潮社、昭和52年
大山定一『ドイツをあるく』知道出版、平成16年
吉川幸次郎・富士正晴編『大山定一』創樹社、昭和52年

参照した独和辞典

独和言林 (白水社、昭和11年)
小独和辞典 [新訂版] (郁文堂、昭和31年)
木村・相良独和辞典 [新訂版] (博友社、昭和38年)
コンサイス独和辞典 [第5版] (三省堂、昭和53年)
小学館 独和大辞典 (小学館、昭和60年)
郁文堂 独和辞典 (郁文堂、昭和62年)
フロイデ独和辞典 (白水社、平成15年)
アクセス独和辞典 [第3版] (三修社、平成22年)

(2011.10.31.)